

早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）第六十一号 二〇一三年二月

『大東世語』「棲逸」篇注釈稿

堀 誠

〔凡例〕

一、本稿は、服部南郭『大東世語』「棲逸」篇の本文と原注に関する注釈である。

一、注釈は、早稲田大学大学院教育学研究科二〇一一年度科目「国文学演習」（堀 誠担当）の受講生（井上翠・趙倩倩・上原菜摘子・橘和久・丹治麻里子・斎藤彰子・仲川泰博）が講読担当話の発表資料に基づいて原稿化した。

一、底本は、早稲田大学図書館蔵本『大東世語』（寛延三年（一七五〇）刊）に依り、また典拠に関しては同館蔵本『大東世語考』（方寸菴漆鍋稿、寛延四年（一七五二）序）を参考にした。

一、「棲逸」篇の都合七話を、「棲逸1」のように順次表記した。

『大東世語』「棲逸」篇注釈稿（堀

一、注釈は本文の「書き下し文」・「訳文」、原注の「書き下し文」・「訳文」、および「語釈」、「典拠」から構成される。

一、「書き下し文」は、原則として底本の訓点を尊重しつつ、適宜これを改めた。

〔棲逸1〕

僧玄奘。初菴_二居三輪_一。朝野欽_二其德行_一。奘惡_二其煩劇_一。滅_レ跡而去_①。經_レ年。其弟子北行。偶見_二河津翁_一。躬著_二敝衣_一。蓬髮改_レ容。良久熟看。似_二故師面_一。乃悲欲_レ問_レ之。而難_二人中_一。且促行不_レ可_レ停。既竣_レ事。歸到_二前津_一。乃不_レ復見_一。問_レ之。皆曰。夫翁計_レ食受_レ雇。不_レ取其餘_一。都無_二他營_一。口常誦_レ佛。某月日失_二所在_一。按_二其月日_一。向相看_レ之時也_②。

〔書き下し文〕

僧 玄賓^{げんびん}、初めて三輪に菴居す。朝野 其の徳行を欽す。賓 其の煩劇を惡^{にく}み、跡を滅して去る。年を経て、其の弟子 北行す。偶^{たま}たま河津に翁を見る。躬^み 敝衣^{ひくい}を著^きて、蓬髮^{ほうはつ} 容を改む。良久^{やう}くして熟看するに、故師の面に似たり。乃ち悲しくして之を問はんと欲す。而して人中を難^{はた}かり、且つ促行して停るべからず。既に事を竣^おへて、歸りて前の津に到るも、乃ち復た見へず。之を問ふに、皆曰く、「夫^かの翁食を計りて雇を受く。其の餘を取らず、都^{すべ}て他の營^{いんぎ}無く、口 常に佛を誦す。某月日 所在を失す」と。其の月日を按ずれば、向きに相ひ看るの時なり。

〔訳文〕

僧の玄賓が、三輪の地に草庵を結んだばかりのころであった。宮中の人も民間の者も彼の徳行を敬い尊んだ。玄賓はそのひどく煩わしいのを嫌って、行方を消してしまった。年を経て、彼の弟子が北方へ下向した。たまたま川の渡し場で翁が目止まった。身にはぼろの衣服を着ていて、ざんばら髪が姿を一変させていた。しばらくじっと見てみると、昔の師の顔に似ていた。そこで悲しくなつて尋ねてみようと思つた。しかし人がいる中ではばかられ、その上、先を急いで止まるわけにはいかなかった。用事を終えて、歸りにこの渡し場に到つたが、再び会えなかった。弟子がその行方を問うと、皆が言うことには、「あの翁は食べるのに必要な分を計つて労賃を受け取っていました。余分なものは受け取らず、他のことは全くしないで、口には常に念仏をと

なえていました。なにがしの月日に所在が分からなくなりました」と。その月日を考えてみると、過日見かけた時であつた。

〔原注〕

- ①玄賓。俗姓弓削氏。其族道鏡。驕淫滔^{たう}天。賓甚醜^{みにく}之。殊深避^は世。
②伊賀郡司家。忽有^二一頭陀人來^一。薊薊^{きき}作^レ庸。久^レ之。其家俄遭^二被^レ坐逐^一。家僮多散。其餘擁^レ主。唯聚泣而已。頭陀乃因^二家人^一進^レ謀曰。且先詣^レ京陳^レ訴。事窮而後散徙未^レ晚。野僧有^二小因^一緣國司公。願與俱行。主人未^レ信。然已無^二他計^一。乃試挾而出^レ都。頭陀曰。我有^レ所^レ識。君暫入^二近舍^一待^レ之。但亦如^レ此形狀。恐見^二疑怪^一。乃借^レ人具^二袈裟^一。而歩進^二國司亞相門^一。門者驚見。相通跪伏。主公盛^レ服出。延^レ之上^レ座。便叙^二中歲滅跡。朝野惋惜之事^一。頭陀曰。此自容^二閑話^一。今乃有^二急當^一請^二告一事^一。貧道年來所^レ憑主人。俄有^レ坐^レ罪。不^レ可^レ忍^レ看。若^二其輕咎^一。願借^二貧道^一。冀從^二原放^一。亞相許諾。即與^二原狀^一。頭陀受喜曰。主人已在^二近舍^一。應^レ須先示^二此狀^一。令^中安心上爾。乃出。在^二近舍側^一。便脫^二法服^一疊^レ之。置^二原狀於其上^一。不^レ見^二郡司^一。滅跡而去。皆知^二是玄賓^一。方歎^二其韜晦^一。

〔書き下し文〕

- ①玄賓、俗姓は弓削^{ゆせう}氏なり。其の族の道鏡、驕りて淫らにして天に滔^はる。賓甚だ之を醜^{みにく}む。殊に深く世を避く。
②伊賀の郡司の家に、忽ち一の頭陀^{づだ}の人の來る有り。薊薊^{きき}の庸^なを作すこと、之を久しくす。其の家 俄かに坐せられて逐はるるに遭

ふ。家僅多く散じ、其餘 主を擁すも、唯だ聚まりて泣くのみ。頭陀乃ち家人に因りて謀を進めて曰く、「且く先ず京に詣りて訴を陳べよ。事窮まりて後散じ徙るも未だ晩からず。野僧 小しく國司公と因縁する有り。願はくは與に俱に行かむ」と。主人未だ信ぜず。然るに已に他計無し。乃ち試みに挟みて都に出づ。頭陀曰く、「我に識る所有り。君暫く近舎に入りて之を待て。但だ亦た此の如き形狀なれば、恐るらくは疑怪せられむ」と。乃ち人に借りて袈裟を具ふ。而して歩みて國司亞相の門に進む。門者驚き見、相ひ通じて跪伏す。主公服を盛んにして出で、之を延きて座に上らしむ。便ち中歳の滅跡、朝野 惋惜の事を叙ぶ。頭陀曰く、「此れ自ら閑話に容る。今乃ち急ぎて當に一事を請告すべき有り。貧道 年來憑む所の主人、俄かに罪に坐すること有り、看るに忍ぶべからず。其の輕咎の若くんば、願はくは貧道を借りて、冀はくは原放に従はむことを」と。亞相許諾す。即ち原状を與ふ。頭陀受けて喜び曰く、「主人已に近舎に在り。應に須く先づ此の狀を示し、安心せしむるべきのみ」と。乃ち出づ。近舎の側に在り、便ち法服を脱ぎて之を疊み、原状を其の上に置き、郡司を見ずして、跡を滅して去る。皆是れ玄實なるを知り、方に其の韜晦を歎ず。

〔訳文〕

①玄實、俗姓は弓削氏である。その一族の道鏡は、驕り高ぶって淫行をもつて天下に権勢をふるった。玄實は大変このことを恥じ憎んだ。特に深く世間の交わりを避けた。

②伊賀国の郡司の家に、不意に一人の托鉢の僧侶がやって来た。芝刈りや樵の庸われ仕事をし、久しく過ごした。その家が突然連座して追放されることになってしまった。使用人は多く離れてゆき、その余った者が主人を擁していたが、ただ集まって泣くだけだった。僧はそこで家の者に計略を進言することには、「とりあえずはまず都に行つて訴えを申し出なさい。事が窮した後に主人のもとを退散してもまだ遅くはありません。拙僧には国司殿にわずかな恩義があります。都へご一緒させてください」と。主人はまだ信じられなかった。しかしすでに他に成すすべは無い。そこで試しに共に都に出かけた。僧が言うことには、「私に知る人がいます。主君は暫く近場の宿に入つてお待ちください。しかしまたこのような風体なので、疑い怪しまれるのではないかと心配です」と。かくして人から借りて袈裟を身につけた。そして歩いて国司大納言の屋敷に入った。門番は驚き見て、（奥に知らせると）ひざまづいて拝礼した。大納言は身なりを整えて出てきて、僧を上座に案内した。そしてすぐさま大納言は（僧が）ここ一年姿を消して、世間の者が嘆き惜しんでいたことを述べた。僧侶が言うことには、「このことは自らまた閑談の折にお話しします。今は急いでお願い申し上げるべき事があります。私がここ何年か世話になつてゐる主人が、突然坐罪を受け、見るに堪えません。その罪が軽いならば、どうか貧僧に免じて、放免していただきたいのです」と。大納言は承諾した。すぐに放免の書状を与えた。僧

侶は書状を受けて喜んで言うことには、「主人はすでに近くの宿に居ります。ぜひ先にこの書状を示し見せ、安心させてあげるのがよいでしょう」と。かくして出ていった。近くの宿のそばに行くと、すぐに法衣を脱ぎこれをたたみ、書状をその上に置き、郡司と会わずに、行方を消してどこかへ去った。皆はそれが玄賓（の行い）であることを知り、まさしくそのつつしみ深いふるまいに感謝した。

〔語釈〕

玄賓 玄賓僧都。？～八一八。法相宗六祖の一人。俗姓弓削氏。河内国の人。興福寺の宣教に学ぶ。桓武・嵯峨両天皇の尊崇をうける。奈良仏教の腐敗を嫌い、伯耆国に通世していたところを延暦二十四年（八〇五）桓武帝の病氣につき召される。大同元年（八〇六）大僧都に任じられるが辞退して隠遁。のち備中国湯川山寺に住した。その逸話は中世の仏教説話に多く残る。

朝野 朝廷と民間。ひろく天下、世間。

煩劇 煩わしく、ひどい。「煩」は、わずらわしい、「劇」は、はげしい、きつい意。

道鏡 ?～七七二。奈良時代の法相宗の僧。河内国の人。弓削氏出身。義淵に学び、大和国葛城山で修行をした。天平宝字六年（七六二）孝謙上皇（のち称徳天皇）の病氣平癒を祈り、以後その寵を得て政界進出。太政大臣・法王の位にのぼり、権力をふるった。宇佐八幡宮の神託を利用して皇位につこうと画策するも、藤原

氏および和氣清麻呂らに阻止され失敗。称徳天皇の死後、下野の薬師寺別当に左遷され、その地で没。

河津 川の渡し場。

敝衣 いたんでやぶれた衣服。

蓬髪 乱れた髪。ざんばら髪。

促行 せわしなく行くこと。「促」は、せわしない、せかす意。

頭陀 僧侶が衣食住にとらわれずに清浄に仏道を修行すること。僧侶が托鉢して歩くこと。

菊薨 「薨」は「芻」に通じ、草を刈る人。「薨」は、きこり。身分の卑しいもの。

坐 坐罪。事件などの関わり合いで罪になること。連座。

家僮 召使。下男。

野僧 僧侶の自己の謙称。拙僧。

亞相 大納言の唐名。丞相（大臣）に並ぐ意。

惋惜 残念なことだと惜しむこと。

貧道 僧などが自分を謙遜して言う言葉。

原放 放免すること、罪を許すこと。

原狀 罪を許した書状。

韜晦 自分の才知や学問などをつつみかくして人に知らせないこと。
韜隱。

〔典拠〕

『古事談』第二〇五話。

『発心集』第一話。

(齋藤 彰子)

〔棲逸2〕

相阪盲人妙_レ於琵琶_一。而高_二樓世外_一。人不_レ得_二傳習_一。曲有_二流泉啄木_一。殊秘不_二常彈_一。無_二能聞得者_一。王孫博雅專_二精琵琶_一①。恨_レ未_レ得_二秘曲_一。且憂_二此盲_一逝。永自此絕。乃欲_二竊得_一焉。試造一見。無_レ由_レ發_レ言而還。爾後每夕密往_二其菴側_一。窺聽三年。未_二嘗有_レ彈。值_二中秋月陰風淒_一。乃復依_レ常往伺_レ之。盲人忽彈_二盤涉調_一。博雅心中悶癢。冀_レ及_二秘曲_一。少頃彈罷。蕭然遣_レ情嘯咏。且歎曰。嗚呼。無_二其人_一哉。當_二此寂寂_一。誰當_レ共_二靜夜思_一者。亦應_レ語_レ心耳。博雅應_レ聲出。乃通_レ名。且具陳_二向來事_一。盲人感歎。終夕晤言。秘曲悉授。世乃稱_二盲人隱趣_一。博雅好事_一至_レ今。

〔書き下し文〕

相阪の盲人 琵琶に妙なり。而して世外に高樓し、人 傳習することを得ず。曲に流泉 啄木有り。殊に秘して常に彈ぜず、能く聞き得る者無し。王孫博雅 琵琶に專精なり。未だ秘曲を得ざることを恨み、且つ此の盲一たび逝かば、永く此れ自り絶せんことを憂ふ。乃ち竊に得んと欲す。試に造りて一見するも、言を發するに由無くして還る。爾の後每夕密に其の菴の側に往きて、窺ひ聴くこと三年、未だ嘗て彈ずること有らず。中秋の月陰り風淒じきに値ひ、乃ち復た常に依りて往きて之を伺ふ。盲人忽ち盤涉調を彈ず。博雅 心中悶癢し、秘曲に

及ばんことを冀ふ。少頃して彈じ罷む。蕭然として情を遣り嘯咏して、且つ歎じて曰く、「嗚呼、其の人無きかな。此の寂寂に當たりて、誰か當に靜夜の思を共にすべき者ぞ。亦た應に心を語るべきのみ」と。博雅 聲に應じて出づ。乃ち名を通じ、且つ具に向來の事を陳ぶ。盲人感歎して、終夕晤言し、秘曲悉く授く。世乃ち盲人の隱趣、博雅の好事を稱して今に至る。

〔訳文〕

相阪に住む盲人は琵琶が非常に巧みであつた。そして世俗を遁れて暮らしたので、人々はその技を習い伝えることができなかった。「流泉」「啄木」という曲があつた。盲人はその曲をとりわけ秘密にしてめつたに彈かず、聞くことのできた者はいなかつた。天皇の子孫である源博雅は琵琶に専心して精妙であつた。未だ秘曲を聞けないことを残念に思い、その上もしその盲人が亡くなれば、この先永久に秘曲が絶えてしまうことを心配した。そこでひそかに秘曲を得たいと望んだ。ためしに赴いて一たび面会したが、言葉を發する機会もなく歸つた。その後から毎晩密かにその庵のそばに行つて、そつと聞き耳を立てること三年が経つたが、依然として彈くことは無かつた。中秋の月が曇り寒風が身に染みる時節にあたり、いつもの様に庵に行き様子を伺つた。盲人はふいに盤涉調を鳴らした。博雅は心中はがゆく、秘曲が彈かれることを願つた。しばらくして彈くのを止めた。ものさびしそうにしみじみと吟詠し、さらに嘆息して、「ああ、なんと人の居ないことか。このひっそりとさびしいときに、誰か静かな夜の思いを共にできるも

のは居ないだろうか。心の内を語り合いたいものよ」と言った。博雅はその声に応じて姿を現した。かくて名前を告げ、合わせて細かくこれまでのことを述べた。盲人は感嘆して、夜通し語り合い、秘曲の全てを授けた。世間では盲人の隠遁の思いと博雅の風流ぶりを称えて現在に至る。

〔原注〕

①世傳。博雅誕時。空中聽「天樂」。

〔書き下し文〕

①世に傳ふ、博雅誕れし時、空中に天樂を聴くと。

〔訳文〕

①世に伝えるところによると、博雅が誕生した際、空中から天上の美しい音楽が聞こえてきた。

〔語釈〕

相阪盲人 蟬丸。生没年不詳。平安時代の歌人、盲目で琵琶・和琴の名手。逢坂の関に住んだとされる伝説的人物。鎌倉時代の初めにはすでに逢坂の関の明神とされ、その社殿は昔の庵の跡とされた。

博雅 源博雅。九一八〜九八〇。平安時代前期の官人、音楽家。醍醐天皇皇子の克明親王と藤原時平の娘の子。従三位皇太后宮権大夫に任じられたことから博雅三位と呼ばれた。和琴を叔父の藤原忠敦、横笛を源雅信から学んだのはじめ、琵琶、箏、篳篥などあらゆる楽器に通じ、村上天皇の命を受け笛譜『新撰楽譜』『博

雅笛譜』を選上した。

專精 精通していること、専心して精妙であること。

盤渉調 雅楽の六調子の一。盤渉の音を宮（主音）とする律旋の調子。

盤渉とは日本の音名の一。十二律の下から十番目の音。

悶癢 はがゆい。「悶」と「癢」、どちらももたえる意。

遣情 心を遣る。気晴らしすること。

嘯咏 歌うこと。「嘯」は、本来口をすぼめて息を長く吐くこと。「咏」

は「詠」に同じ。息を長く吐いて歌うこと。

向來 今まで、従来。

終夕 一晩中、夜通し。

唔言 顔を合わせて語る。面と向かって話す。

隱趣 隱遁者の生きがい。

好事 風流なこと。

〔典拠〕

『江談抄』第三―第六十三話。

（仲川 泰博）

〔棲逸3〕

前中書王作「池亭」曰。夏條爲「帷」。冬冰爲「鏡」。南島之五大夫作「老伴」。東岸之「脉泉」爲「知音」。

〔書き下し文〕

前中書王 池亭を作りて曰く、「夏の條を帷と爲し、冬の氷を鏡と爲す。南島の五大夫を老伴と作し、東岸の一脉泉を知音と爲す」と。

〔訳文〕

前中書王が池亭を作つて言うには、「夏の枝を帷とし、冬の氷を鏡とする。南島の松を伴侶とし、東岸の泉を無二の友とする」と。

〔語釈〕

前中書王 兼明親王。九一四〜九八七。平安時代前期の人。醍醐天皇の皇子で、母は藤原菅根女の更衣淑姫。九三二年、源姓を賜り臣籍降下。九五九年には、邸内に小亭を営んで隠退を志し、『池亭記』を著す。九七七年、左大臣を退いたのち親王宣下があり、中務卿となるが、九八六年に辞任。前中務卿を唐名で表現して前中書王と称せられた。のち嵯峨に隠棲して孤独文雅の生活を送る。博学多才で詩文を能くし、その悲劇的生涯から多くの伝説が生まれた。

池亭 池のほとりの亭。池に臨んで作られているあずまや。
帷 えだ。こえだ。わかえだ。

帷 たれぎぬ。かたびら。まく。周辺にたれる布。

五大夫 松の異名。泰山に封禪した秦の始皇帝が雨に降られ、雨宿りした松の樹に五大夫の位を授けたという故事から。

老伴 ひさしい間の伴侶。妻をいうことば。また、年とつた伴侶や、老後の伴侶。

一脉泉 「脉」は「脈」の俗字。「脈」は、みずみち、水道。「脉」を「眼」

に作るテキストもある。

知音 心の底をうちあけて話すことのできる友。心の通じ合った親友。無二の友。中国の春秋時代、琴の名手伯牙のひく曲を、その友人鍾子期はよく理解していた。鍾子期の死後、伯牙は自分の音楽の真髄を理解してくれる友は他にはいないとして、琴の弦を切ってしまったという故事（『蒙求』では「伯牙絶絃」と題する）から。

〔典故〕

『本朝文粹』卷第十二「池亭記」（前中書王）

（井上 翠）

〔棲逸 4〕

黄門源顯基。受「寛仁帝①恩眷」。晏駕初。暝在「省中」。怪「梓宮燭進頗遲」。問之。或曰。女侍輩亦皆已給「事新帝宮」。乃無「供者」爾。黄門深悲「人情變移」。即日落飾。逃于深山。

〔書き下し文〕

黄門源顯基、寛仁帝の恩眷を受く。晏駕の初め、暝に省中に在り。梓宮燭の進むこと頗る遅きを怪しみて、之を問ふ。或曰く、「女侍輩も亦た皆已に新帝の宮に給事す。乃ち供する者無きのみ」と。黄門深く人情の變わり移ろふを悲しみ、即日落飾して、深山に逃る。

〔訳文〕

中納言 源顕基は、寛仁帝（後一条天皇）に寵愛されていた。寛仁帝が崩御されて間もなく、暮れに宮中にいた。帝の棺のもとに灯りが届くのが遅いことを訝しみ、その理由を尋ねると、ある者が「侍女たちも皆、既に新しい帝のもとにお仕えしております。そこで、帝の棺に灯りをお届けする者がいないのです」と言った。顕基は人の情が移り変わってしまったことをひどく悲しみ、その日のうちに髪をおろして、深山に逃れ去った。

〔原注〕

①後一條。

〔書き下し文〕

①後一條なり。

〔訳文〕

①後一條天皇である。

〔語釈〕

黄門 中納言の唐名。

源顕基 源顕基。一〇〇〇～一〇四七。平安時代中期の公卿。権大納言源俊賢の長男。母は右兵衛督藤原忠君（一説に忠伊）の女。

関白藤原頼通の猶子となる。年少より学問を好み、長元二年

（一〇二九）正月、藏人頭左中将から参議に任ぜられ、ついで

従三位権中納言となる。後一条天皇の恩寵厚く、天皇崩御後の

長元九年、「忠臣二君に仕えず」として横川楞嚴院に登り落飾

した。法名は円照（一説に円昭）。後に大原に住み内外の典籍

に親しみ念仏読經の生活を送る。永承二年（一〇四七）、四十八歳で死去。歌人としても知られ、『後拾遺和歌集』以下の勅撰集に入集している。

寛仁帝 後一条天皇。一〇〇八～一〇三六。在位一〇一六～一〇三六。

一条天皇の第二皇子。母は藤原道長の娘である彰子。数えて四歳の時に三条天皇の皇太子となり九歳で即位した。外祖父である藤原道長を摂政とし、後に藤原頼通を摂政、ついで関白に任命した。長元九年（一〇三六）四月十七日に清涼殿で崩御。

恩眷 あつく目をかけること。恩顧。

晏駕 天皇や上皇が亡くなること。「晏」は晩、「駕」は乗り物の意であり、日が暮れてから棺が出発することに由来した語である。

また、天子が亡くなってもう朝廷に来られないことを、いつもより遅いお出ましと表現したところから来ているとの説もある。

暝 日暮れ。また、夜の意。

省中 宮中の意。漢の孝元皇后の父の名が「禁」であったことから、それを避けて「禁中」のかわりに用いられるようになったとされる。また、宮中に入ると皆かえりみ、妄りな行動は慎まなければならないことからこの呼び名があるとも言う。

梓宮 天子の遺骸を収めたひつぎ。梓の木で作られていたことに由来する。

給事 貴人の身の回りの世話、雑用をすること。給仕。

新帝 後朱雀天皇。一〇〇九―一〇四五。在位一〇三六―一〇四五。

一条天皇の第三皇子。母は藤原彰子。数えで九歳の時に後一条天皇の皇太子となり、二十八歳で即位。『後朱雀天皇宸記』を著し、詠歌が『後拾遺和歌集』、『新古今和歌集』などに収められている。

落飾 高貴な人物が髪を剃りおとし、仏門に入ること。

〔典拠〕

『今鏡』「すべらぎの上」 第一「もちづき」。

（橘 和久）

〔棲逸5〕

源顯基隱遁大原。永謝人世。宇治公當國。往訪其居。話舊終夕。唯談佛理。一無及世事。公將歸。主人曰。賤息資綱①。素已暗劣耳。公時未省。唯疑伊人無故不可貶惡其子。三思乃寤其附託之意。惘然謂雖亦在空谷。愛顧之念。常不可忘。則不堪乃發言爾。於是每事保存其人。

〔書き下し文〕

源顯基 大原に隱遁して、永く人世を謝す。宇治公當國のとき、往きて其の居を訪ぬ。舊を話すこと終夕、唯だ佛理を談じて、一も世事に及ぶこと無し。公將に歸らんとするに、主人曰く、「賤息資綱、素より已に暗劣なるのみ」と。公時に未だ省せず、唯だ疑ふ「伊の人故

無くして其の子を貶惡すべからず」と。三思して乃ち其の附託の意を寤り、惘然として謂へらく「亦た空谷に在りと雖も、愛顧の念、常に忘るべからざれば、則ち堪へずして乃ち言に發するのみ」と。是に於いて每事其の人を保存す。

〔訳文〕

源顯基は大原に隱棲し、長く世間との交わりを絶っていた。宇治公（藤原頼通）が閑白であった時、その住まいを訪問した。夜もすがら旧事を語り合ったが、ただ仏教の教理を談じるばかりで、一つとして俗事に話が及ぶことがなかった。公が帰ろうとすると、主人は、「せがれの資綱は、もともとまことに愚劣なのです」と言った。公はまだその時は察しがつかず、ただ「この人が理由もなく自分の子を悪しざまにいうはずがない」と訝しんだ。よくよく考えた末に、私に委託する思いを悟り、哀れがって、「この人もまた人の通わぬ谷に出家の身を置きながら、自分の子供への愛情はいつも忘れられず、思わず言葉に出してしまったのだ」と思った。こうして、（宇治公は）事ある毎にその人（資綱）に目をかけたのである。

〔原注〕

① 一云資經。

〔書き下し文〕

① 一に云ふ、資經なりと。

〔訳文〕

① 一説に言う、資經であると。

〔語釈〕

源顯基〔棲逸4〕〔語釈〕「源顯基」参照。

大原 京都市左京区の地名。八瀬の北にあり、高野川に沿う小さな盆地をなす。古くから山門延暦寺との関係が深く、寂光院・来迎院・三千院などの古刹がある。

宇治公 藤原頼通。九九二～一〇七四。平安時代中期の公卿。摂政太政大臣道長の子。母は左大臣源雅信の女倫子。宇治に平等院を建立したことから宇治殿、宇治関白と呼ばれる。権中納言、権大納言、内大臣を歴任後、寛仁元年（一〇一七）三月に父の譲を受け後一条天皇の摂政、同年十二月に関白となる。晩年は平等院に住み、延久四年（一〇七二）に出家した後、承保元年（一〇七四）に八十三歳で死去した。

當國 国政に当たる。政権を握る。また、『春秋左氏伝』では「於是子罕當國、子駟爲政、子國爲司馬」〔注〕攝「君事」也。』とあり、君主の事務を代わりに行うことをいい、相国の意味に近い。顕基が出家隠遁し死に至るまでの十数年の間、頼通は常に関白の位にあつたため、ここでは関白と訳した。

終夕 夜もすがら。一晩中。

佛理 仏教の教理。

世事 世俗の事柄。俗事。

資綱 源資綱。？～一〇八二。平安時代中期の公卿。権中納言源顕基の子。母は藤原実成の女。正二位中納言に至る。永保二年

（二〇八二）に出家し、同年六十二歳で死去した。〔備考〕を参照。

暗劣 ことにくらく愚かなこと。暗愚。闇劣。

貶惡 そしり憎む。貶める。

三思 深く思案すること。

附託 まかすこと。あずけたのむ。託す。委託。

惘然 哀れに思う。

空谷 寂しい谷。静かな谷。

愛顧 慈しみ目をかける。目をかけて引き立てること。

不堪 思わず。耐えられず。

保存 失わぬよう大切に保つ。

資經 未詳。『尊卑分脈』には資經の名は見えない。

〔典拠〕

『古今著聞集』巻八・孝行恩愛第十「中納言顯基後一条院崩御の後出家の事」。

〔備考〕

典拠である『古今著聞集』においては、顕基は「俊實は不覚のものとて候」と甥の息子である源俊実を頼通に託しているが、本話では実の息子である資綱に変更されている。「子息」という言葉から、甥の息子を託するのは不自然であるという筆者の判断によるものか。

（上原 菜摘子）

〔棲逸6〕

藤給事通憲諸子。多爲^レ僧有^レ名^①。其季明遍獨隱。高^レ棲紀高野山^一。頗疾^三僧侶之奔^二競官榮^一。諸兄數勸^レ其出^一。遍答曰。夫^レ遯^レ世者。吾棄^レ世。世亦棄^レ吾不^レ齒。是遯^レ之全者也。世棄^レ我。我不^レ棄者。丐人也。我棄^レ世。世不^レ棄^レ我者。今^レ之諸名德也。此^二者非^二眞遯^一也。諸兄皆已南北之高德也。我不^レ欲^下以^二不才^一廁^二其間^上。

〔書き下し文〕

藤給事通憲の諸子は、多く僧と爲りて名有り。其の季明遍獨り隠れ、紀の高野山に高棲す。頗る僧侶の官榮に奔競するを疾む。諸兄數しば其の出でんことを勸む。遍答へて曰く、「夫れ世を遯るる者は、吾世を棄て、世も亦た吾を棄てて齒せず。是れ遯るるの全き者なり。世我を棄て、我棄てざる者は、丐人なり。我世を棄て、世我を棄てざる者は、今の諸名德なり。此の二の者は眞遯に非ざるなり。諸兄皆已に南北の高德なり。我不才を以て其の間に廁はらんことを欲せず」と。

〔訳文〕

少納言藤原通憲の息子たちは、多く僧侶となり名声があった。その末子の明遍は独り気高い志を持って世を逃れ、紀伊国の高野山に隠棲していた。(彼は)僧侶が名誉ある官職を争い求めることをひどく嫌っていた。兄たちはしばしば彼に山を下りるように勧めた。明遍が答えて言うことには、「そもそも世俗から隠れ棲むというのは、吾が世を

捨て、世もまた吾を見捨てて相手にしない。このような関係こそが世を逃れることの全きあり方なのです。世が我を捨て、我が(世を)捨てないのであれば、物乞い人に他ならない。我が世を捨て、世が我を捨てないというのは、それこそ今の名高い僧侶の方々のことです。この二つの生き方は、眞の遁世ではありません。兄上方は皆すでに南北二京の有徳の僧でいらっしゃいます。私は不覺の身でありますのでその中に交わろうとはいたしません」と。

〔原注〕

① 靜賢、澄憲、勝覺、覺憲。

〔書き下し文〕

① 靜賢、澄憲、勝覺、覺憲なり。

〔訳文〕

① 靜賢、澄憲、勝覺、覺憲である。

〔語釈〕

給事 給事中のこと。少納言の唐名。

通憲 藤原通憲。一一〇六―一一五九。平安時代後期の政治家。父は

藤原実兼。曾祖父実範以来の学問の家に生まれ、通憲自身も博学多才であったが、七歳のときに父が急死し受領の高階経敏の養子となったために儒職に就くことはかなわなかった。康治二年(一一四三)頃に出家を思い立つたが鳥羽院の聴許なく、翌天養元年少納言に任ぜられた。それから間もなく氏を藤原姓に復し、同年七月に出家。法名は円空、のち信西と改めた。

季 兄弟のうちで最年少の者。末っ子。

明遍 一一四二～一二二四。平安末から鎌倉初期にかけての真言僧。

藤原通憲の子。平治の乱に際し、父に連座して越後国に配流。帰京後は東大寺で三論をまなぶが、のち光明山寺に遁世。建久六年（一一九五）高野山にはいり、蓮華三昧院をひらいて三十二年間山をおりなかった。

高棲 俗世間から逃れて静かに暮らすこと。

紀 紀伊のこと。現在の和歌山県、及び三重県の南部。

高野山 和歌山県伊都郡高野町。南山とも呼ばれる。弘仁七年（八一六）に空海が修禪の道場として開創した。

疾 嫌う。

奔競 走り競う。争って利益や官職を求めること。

官榮 名譽ある官職・官位。

遁世 遁世とも。世を逃れて仏門に入ること。また、世俗化した寺院から身を退いて、学問・修行に励むこと。

齒 仲間に加わる。同列に立つ。

丐人 乞食。

名徳 名声が高く、徳行のあること。多く、僧侶の尊称として用いる。

靜賢 一二四〇？。平安後期から鎌倉時代にかけての僧、歌人。藤原通憲の子。京都の法勝寺執行（寺の事務または法会を管掌する役）。平治の乱で一時丹波に流される。歌は『千載和歌集』などに収録される。

澄憲 一一二六～一二〇三。平安後期から鎌倉時代にかけての僧。藤

原通憲の子。平治の乱で一時下野に流される。京都の安居院にすみ、唱導（説法）で教化につとめた。

勝覺 一〇五八～一一二九。平安時代の真言僧。源俊房（一〇三五～

一一二一。平安時代の公卿）の子。醍醐寺座主、東大寺別当、東寺長者を歴任した。南郭が通憲の子と誤認したか。

覺憲 一一三一～一二一三。平安後期から鎌倉時代にかけての僧。興福寺の別当となり、焼失した同寺の再興に力をつくした。建久六年（一一九五）東大寺大仏殿落慶供養の導師をつとめた。

〔典故〕

『沙石集』卷第十一 第四話。

（丹治 麻里子）

〔棲逸7〕

中山黃門①。與參議藤成賴②親睦相善。公私出處。深相契交。俄而參議棄官。隱高野山。公曰。斯人肥遁。今我於世。萬事休矣。乃遣使問其隱趣。且密命令圖其山棲構致而還上。無幾。公亦結宅中山。辭官入居。再遣言參議。請令一解事人來。其人來。公乃令其周流中山居遍覽上。則屋宅廣狹。以至戸席。都徧高野棲居。毫無異者。參議聞其事笑曰。若夫極樂國。則固應難慕。徧爾。

〔書き下し文〕

中山黄門、参議藤成頼と親睦相善し。公私出處、深く相ひ契交す。俄かにして参議 官を棄て、高野山に隠る。公曰く、「斯の人肥遯す。今 我 世に於いて、萬事休んぬ」と。乃ち使を遣はしてその隠趣を問はしむ。且つ密かに命じてその山棲の構致を圖して還らしむ。幾くも無して、公も亦た宅を中山に結び、官を辭して入りて居る。再び遣はして参議に言はしむ。「請ふ一の解事の人をして來しめよ」と。其の人來たる。公乃ち其をして中山の居を周流し遍覽せしむ。則ち屋宅の廣狹、以て戸席に至るまで、都て高野の棲居に効ふ。毫も異なる者無し。参議其の事を聞いて、笑ひて曰く、「若し夫れ極樂國ならば、則ち固より應に慕効し難かるべきのみ」と。

〔訳文〕

中山黄門顯時は参議成頼と仲がよかった。公私にわたって交わり深かったが、成頼が突然官職を辞めて高野山に隠居した。顯時が言うことには、「この人が隠遁なさり、我はこの世においてすることがなくなった」と。そこで、使者を遣わして隠居の趣を尋ねようとした。且つその山居の様子を描いて戻るように密かに命じた。さほど経たずに、顯時も中山に家を構え、官を辞めて移り住んだ。再び使者を送って、「一人の物事に通じた者をよこしなさい」と成頼に言わせた。その者が来ると、顯時は中山居のまわりをあまねく見て回れと命じた。見ると、家の広さから戸口や座席まですべて高野居に倣つて、何一つ違ふところがなかった。参議成頼はそのことを聞いて、「もしこれが極樂の国

であるならば、慕いならうことは難しいだろう」と笑っていた。

〔原注〕

①中山藤黄門顯時。参議長隆之子。

②中納言顯頼之子。官参議。

〔書き下し文〕

①中山藤黄門顯時なり。参議長隆の子なり。

②中納言顯頼の子なり。官は参議なり。

〔訳文〕

①中山藤黄門顯時である。参議長隆の息子である。

②中納言顯頼の息子である。官は参議である。

〔語釈〕

中山黄門 藤原顯時のこと。中山中納言と称されることから中山黄門か。黄門は中納言の唐名。

参議 官名。昔、日本の朝廷組織の最高機関である太政官の官職の一つである。大政を議した官。

顯時 藤原顯時。一一一〇～一一六七。公家。長隆の子。天承元年

(一一三二) 藏人となり、その後諸官を経て平治元年(一一五九)

参議となる。権中納言、正三位大宰権帥に至り、仁安二年

(一二六七) 従二位民部卿。中山中納言、栗田口帥と称す。

長隆 藤原長隆。藤原顯時の父である。因幡守であつたという。

成頼 藤原成頼。一一三六～一二〇二。平安後期～鎌倉前期の公卿、

僧。仁安元年(一一六六)参議、二年(一二六七)正三位となる。

修理大夫を兼任。承安四年（一一七四）兄葉室光頼の一周忌に出家、後に高野山に入り、高野山にて大往生したという。高野宰相入道と号される。

顯頼 藤原顯頼。藤原成頼の父。一〇九四～一一四八。嘉承元年（一一〇六）従五位下に叙し、出雲・三河・丹後・丹波守、中宮権大進などを経て、天承元年（一一三一）参議、のち権中納言、正二位に至る。鳥羽・白河院の近臣として知られる。

公私 公事と私事。

出處 出でて官に就くことと退いて家に居ること。朝に在ることと野に処ること。

契交 親密に交わる。

高野山 和歌山県北東部にある。日本九品浄土の最高位にあるという。肥遯 ゆつたりとして世を逃れ隠れる。高隠。

萬事休 すべての事が休止する。万事はあらゆること。

構致 人材を招いて集める。ここでは、構造の意か。

解事 事をさとする。事に練達する。

周流 めぐりながれる。転じて、広くゆきわたる。

極楽国 極楽は仏教の理想の世界。極楽国とは極楽世界、極楽浄土と同じ意味か。『十訓抄』では、「上品上生大溪山」とあり、それを「極楽」にかえている。

慕効 したいならう。

〔典拠〕

『十訓抄』第五「可選朋友事」。

〔備考〕

典拠の『十訓抄』では、中山黄門を中山忠親とする。中山忠親は、一一三二～一一九五。権中納言藤原忠宗の男。正二位、内大臣に至る。中山に閑居したので中山内大臣と称された。

（趙 倩倩）